

2 無側枝性ギクの電照による省力化と盆出荷

ねらいと成果

露地における一輪ギク栽培では無側枝性ギクの導入が進んでいる。無側枝性ギクとは芽なしギクとも呼ばれ、側芽や側蕾の着生が少ない特性を有し、摘芽・摘蕾作業が省力できる。しかし、自然開花期が6月から7月になるタイプは側芽・側蕾が着生しやすく、大幅な省力にはならない。そこで、7月咲きの無側枝性ギクを使用して、電照により花芽分化を抑制し、8月上旬開花の作型に適用したところ、側枝・側蕾の着生数が減少し、大幅な省力化が図られるとともに盆需要にも対応できることがわかった。

内容

神戸市および三木市の一輪ギク産地から7月咲き無側枝性ギクとして入手した4品種を供試し、自然開花区と電照(白熱灯による深夜5時間の照明処理)区を設けた。2003年4月21日の定植と同時に電照処理を開始した。処理は6月13日まで行い、処理終了後は自然日長下で開花させた。

自然開花区は6月30日(「浜の島」)から7月10日(「精の和」)に開花した(表1)。電照区は7月27日(「清風」)から8月5日(「浜の島」)に開花した。電照区の切り花形質は「清風」では切り花長が74cmと若干短かったが、他の品種は80cm以上、切り花

重が70g以上あり、商品性の高い切り花が得られた。側枝・側蕾着生率は自然開花区が平均64%で、電照区は平均12%と低くなった(表1)。

自然開花区と同様の条件で栽培した7月咲きで、無側枝性を有しない5品種(普通品種と呼称)の側枝・側蕾着生率 $\left\{ \frac{\text{側枝・側蕾着生節数}}{\text{全節数}} \times 100 \right\}$ は平均86%で、無側枝性品種・自然開花区の64%、無側枝性品種・深夜照明区の12%に比べて高かった。10a当たりの摘芽・摘蕾作業は普通品種では270時間要するが、無側枝性品種・自然開花区では202時間で13%の省力、無側枝性品種・電照では38時間で74%の省力になった(表2)。

以上のように7月咲き無側枝性ギクは日長に感応し、電照による抑制栽培に適用でき、8月上旬に開花させることで、摘芽・摘蕾作業が大幅に省力化できることがわかった。また深夜照明終了後の到花口数の年次変動は小さい(ひょうごの農業技術No.126、P.7参照)ので、処理終了時期を調節すれば、盆需要にも安定して出荷できることが見込まれた。

普及上の注意事項

電照終了時期を調節すれば、9月の彼岸需要への対応も期待できる。

小山 佳彦(農業技セ・園芸部)

表1 7月咲き無側枝性ギクの電照が開花と切り花形質に及ぼす影響

品種	処理	草丈 (cm)	開花日 (月・日)	切り花長 (cm)	切り花重 (g)	節数 (節)	側芽・側蕾数 (本)	側芽・側蕾 着生率(%)
浜の島	自然開花	49	6. 30	44	38	21	16	76
	電照	98	8. 5	92	72	49	8	17
清風	自然開花	50	7. 2	48	58	29	17	60
	電照	80	7. 27	74	72	51	8	16
精の新	自然開花	54	7. 8	51	75	29	15	50
	電照	88	8. 2	82	99	57	4	7
精の和	自然開花	57	7. 10	49	51	29	21	71
	電照	98	8. 3	91	99	64	5	8

注)3月27日挿し芽、4月21日定植、4月28日ピンチ、6月13日電照(午後10時～午前3時)終了

表2 7月咲きギクを使用した作型における摘芽・摘蕾作業の省力程度の比較

タイプ	作型	側芽・側蕾 着生率(%)	摘芽・摘蕾 (時間/10a)	省力程度 (%)	全ての作業 (時間/10a)	省力程度 (%)
7月咲き普通品種	自然開花	86	270	0	869	0
7月咲き無側枝性品種	自然開花	64	202	13	834	4
7月咲き無側枝性品種	電照抑制	12	38	74	670	23

注)7月咲き普通品種の作業時間は地域農業経営ハンドブック(第7輯)による